
みちしるべ

朝霧幸太

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

みちしるべ

【Nコード】

N4754Q

【作者名】

朝霧幸太

【あらすじ】

B A Rを舞台とした人間模様。

探す女と逃げる男。

男を逃がす為にマスターの取った行動とは？

探す女

【若年層の失業率悪化】

フリーターも増加の恐れ

総務省が2011年1月28日に発表した労働力調査によると、2010年平均の年齢層別完全失業率で、大半が改善か横ばいとなる中、15〜24歳の若年層は前年比0.3ポイント上昇の9.4%となり、悪化が際立った。

長引く不況による新卒者の就職率低下が影響しており、失業者に加え、10年以降はアルバイト・パートとして働くフリーターもさらに増加する恐れが強い。

政府は新卒者への就職支援を強化しているが、若年層の雇用環境は容易に改善しない現状にある。

僕がカウンターの右端で携帯を操り、ニュースを読んでいた時のことだ。

ギイと音が鳴ったので、入口へ眼を向けると、若い女性が店内を

見回している。

二十代後半ぐらいだろう。一瞬、目が合ったので会釈をすると、彼女も会釈を返したが、僕には興味がないらしい。

「いらっしやい。お久しぶりですね。お一人ですか？」

マスターが声をかけた。

「こんばんは。マスター、訊いていいですか？」

その若い女性は、カウンターの左端に座るなり、マスターに問いかけた。

「何をです？」

「表の看板だけど、前は【明日へ】だったわよね？　それが今日、来てみたら【みちしるべ】になってる。あたし、経営者が変わったのになって、ドキドキしちゃった」

「ええ、気分転換で変えてみました」

マスターは、戸棚を開けて何かを取り出している。

「まさか！ 気分転換だなんて……そんな訳ないでしょ？」

「うーん。実は、ちょっとした心境の変化です」

「ほらあ、やっぱり何かあったんじゃない。教えて下さいな」

「何を作りましょうか？」

「あつ、そうじゃないの。人を捜しているの。ほら、この前あたしと一緒に、ここへ来た男。青井好太郎って言うんだけど……でも、本名は弥太郎って言うのよ。青井弥太郎」

彼女は、身を乗り出して、やや声をひそめた。

「ほほう。弥太郎とは、今の時代にしては渋いお名前ですな。でも与太郎でなくて良かった」

「どうして？」

「落語に出て来るでしょう。考える力が不足していて、トンチンカ

んな受け答えをする人物。与太郎とは、そんな人間の代名詞です」

「そうなの？」

「そうです」

「彼は弥太郎だから、あたしは、やつちゃんって呼ぶんだけど、本人はヤクザみたいに聞こえるから止めてくれよって……ふんっ！
気が小さいのよ」

「それは……名は体を表すと言いますからね。《青井！ やつたろう！》とも聞こえますね。……それで？」

「うぶっ、くくくっ……」

僕はマスターの冗談に笑い出しそうになったが、なんとかこらえた。

「あれから彼が、ここへ誰か他の女と来てませんか？」

彼女はマスターを見つめている。嘘は言わせないと厳しい眼差しだ。

「はて……」

マスターは、顎に手をやり、天井を見上げている。

いかにも真剣に記憶を辿る仕草だ。

「来てませんね」

「そう」

彼女は、半ば安堵したような表情を見せたが、納得はしていない……と言っよりがっかりしたようだった。

マスターはコーヒーを淹れている。自分で飲む為だろうか？

彼女は僕を見て言った。

「お騒がせして、ごめんなさいね」

彼女は微笑みながら言ってくれたが、僕は緊張した。

「あつ、いいえ」

「どうぞ。カフェオーレです。魅力的な女性のお客様だけの特別サービスですよ」

「あらっ、お上手なこと。でも、ありがとう。いただきます」

彼女は、それに口をつけてから、携帯を開いて電話をかけた。

やがて彼女は携帯をたたんで言った。

「やっちゃんがね。電話に出ないのよ。この前、他の女と歩いてるところを、あたしに見られたもんだから逃げ回ってるのよ」

彼女から本音が出たようだ。

「ふむ……」

マスターは、それについては応じない。

「あんちくしょう！ 見つけたら、ただでは済まさないからっ！
今に、眼にももの見せてくれるからっ！」

女性は、語気を荒げて、穏やかではないことを口走っている。

僕は、一瞬びびった。

「ふむ……そういうご事情ですか。しかし余り感情的に責めても彼は逃げるばかりでしょう。ここは落ち着いて、まずは話し合いの場を作るほうが」

「そうじゃないのよ！ あんな奴に未練がある訳じゃないの。許せないのよ！ いいように遊ばれたまま、泣き寝入りなんて悔しいじゃないの！ こっちが振るならともかく……冗談じゃないわよっ！」

マスターの言葉を遮るように彼女は言い、同時にカウンターを叩いた。

「こうなったら、何が何でも見つけ出して、とっちめてやるわ！
相手の女の前で騒ぎ立てて、正体を暴いてやるのよ！ そうでもない！と気が済まないわよ！」

「いやはや……怖いすな」

「あつ、マスター、さっきの続き」

「えっ？　なんでしたかな？」

「看板の名前を変えた理由よ」

「ですから心境の変化と」

「だから、その心境が変わったのは、どいう事情かって訊いてるのよ」

女性はマスターを睨んでいる。

「人生は漫然と生きるには短か過ぎる。そろそろ腰を据えて、新しい人生を追求しなければならなくなった、と言うところですかな」

「また、そんな人をケムに巻くような言い方をして。さては……誰か、いい人が出来たんでしょ！」

「うつ！ これは、見抜かれてしまいましたな。その通りです。私は、男を上げる必要に迫られました。よって、心機一転、燃える闘魂を形に表そうと、看板を変えてみたのです」

「何を言ってるのよ。何が燃える闘魂なのよ。そうじゃないでしょ？ あたしが訊いたのは、どんな女性がマスターの……まあ、いいわ。今日は用事があるから、この次、聞かせてね」

女は時計に眼を遣りながら立ち上がった。

「もし、やつちゃんが立ち寄ったら、ここへ電話して。お願い」

彼女は、メモを残して店を出て行った。

あの様子では、心当たりを、しらみつぶしに捜すに違いない。

サムシング

「マスター、やっぱり僕は、都会生活に向いてないんでしょうか？」

僕はハイボールを呑み干した。

「んっ？ 向いてないとは？ 都会の空気が体に障り（さわり）ますかな？」

マスターは、グラスを磨いていた手を止めて訊き返した。

「いや、僕みたいな田舎者は、田舎で、やり直した方がいいのかなって……これ、お代わり下さい」

「はい」

僕はピスタチオの殻を割って口に入れる。

「何故、そう思うんです？」

マスターは、ハイボールを作りながら訊いた。

「だってね。ここじゃ彼女が出来ないんです。都会に住む女は、イケメンしか眼に入らないようだし……そもそも、僕みたいな泥臭い田舎者は、都会人になり切れないと思うんですよね」

「ふむ。そう感じるのなら、都会に住むことに、こだわることはないですな。ただ……」

「ただ……？」

「都会と言っても、所詮は田舎者の集まりですよ」

マスターは、ハイボールを僕の前に置いた。

「田舎者？」

「田舎者がたくさん集まる。都で色々な人間に会う。だから都会なんです」

「なるほど。そうですね」

「花の都と言うでしょう。フラワーを指すのではなくて、華やかで、刺激があつて発展性のある【都会】を指して華の都と言うのです。パリや東京が、その典型でしょう。人は、特に若者は、華やかな場所に集まろうとするものです。あなたも、田舎を出る時に都会に憧れを持ったでしょう?」

「ええ、確かに」

「文字通りの花の都もありますよ。フィレンツェがそうです。英語でフローレンスと言います」

マスターはマッチで煙草に火をつけた。

「そうなんですか? なるほど。そう言えば、フローレンスなんとかつて、花屋の看板を街中で見かけますよね。フィレンツェの意味なんですね。だけどフィレンツェって……」

「イタリアです」

「ふーん」

僕は、漠然と花の咲き乱れる街並みや公園を想像した。

「もし、恋人を欲しいのなら、方法があります」

「えっ？」

僕は、グラスを傾ける手を止めた。

「教えてくださいか？」

「えっ？ ホントですか？ ぜ……ぜひ、お願いします」

「しかし、その前に、問題の本質は、都会で何をやりたかったか？
と言うことではないのですかな？」

「それは……ええ」

「例えば、モノレールの運転士や、地下鉄の運転士をやりたければ
都会に住んだ方がいい。工場要員なら田舎でも構わないでしょう。
私のような商売なら、都会がいい」

「そう。僕は工員です。それも期限契約の派遣社員」

「それは、やりたかった仕事ではないのですか？」

「いや、もちろん違いますよ。他に条件のいい、つまり正社員で雇ってくれる勤務先が見つからなかったから、仕方なくやってるんです」

「ふむ……こんな、ご時勢ですからね。贅沢も言えない。新卒者を採用できなくなるほど、日本企業は生産拠点を海外に移転させてしまった。しかし、それでも中国やインドの経済成長が続けば、またチャンスが巡って来るでしょう」

「マスターに取っては所詮、他人事ですからね。気楽に言いますけど、僕等のような使い捨て扱いの人間に、そんなチャンスがあるかどうか……」

こんな風に言えば少しは慰めてくれる……と僕は思った。

だが、マスターは何も言わない。僕は言い過ぎたのだろうか？
気分を損ねたかも知れない。

マスターは何かを考えながら静かに紫煙をくゆらせている。そう

して、やや間を置いてから口を開いた。

「今の生活が辛いですか？　楽しい事が全く無いのですか？」

「いえ、まあ、責任を負わなくていい仕事だから、気楽だし、たまに仲間と飲む時は楽しいですね」

「あなたは、まだ、お若い。本当にやりたい仕事が、見つからないのでしょうか。しかし、いずれ見つかります」

マスターは煙草を消して、すぐに灰皿を下げた。

「なぜ、そう言い切れるんですか？」

「選択肢や可能性があり過ぎるからです。だから決まらない。年が行けば、もう、これをやるしか生きる道が無いと追い詰められます」

「追い詰められる？」

「そう。色々試して、あれもダメ、コレも無理と解って来ます。それは単に適性と言うより、心から、これだと思える何かです。サ

ムシンググです」

「サムシング？」

「そう。そのサムシングは、人それぞれです。それが掴めれば迷わずに、その分野で自分の役割を果たそうと努力するでしょう」

「役割？ ……ですか？」

「そう。役割です」

「考えたこともなかった……」

僕は、ハイボールを空けていた。

「自分は、このポジションで役割を果たして行こう！ と腹が決まれば仕事を楽しめます。それが生きる目的です」

「生きる目的？」

「そうならば自信が生まれ、目標が定まる。その目標は他人から押し付けられたものではない。自分で決めた目標です」

「自分で決めた目標」

「そう。自分で決めた前向きな目標に向かって打ち込んでいる人は強い。それだけで輝いています。自分でも気づかぬ内に魅力を光らせているんです」

「あつ、はい」

その通りだと思った。確かに僕は、これだと感じるサムシングを掴めてはいない。だから自信も無いし、目標も無い。だから魅力が無いのかも知れない。

「人間としての魅力というのは、如何に自分らしく生きるか。如何に生き活きと生きているかに尽きるのです。そして、これは年齢に関係がない」

ああ、そうだ。確かにそうだと、僕は思った。

「そうなれば、自然に女性にモテるということですか？」

「もちろん、そうです。いや異性を惹きつける魅力だけでなく、誰の眼にも輝いて見えるのです。あなたも、いずれは、そうなる」

そこで、マスターは柔和な笑顔になった。

「さあ、どうぞ」

コーヒーを淹れてくれた。真剣に聞き入っていた緊張をほぐす配慮だと解った。

店の電話が鳴った。

逃げる男

「はい？ ああ、青井さん。ええ、覚えていますよ。……はい、開けています」

客からの問い合わせのようだ。

「えっ？ 近くに？ すぐに？ ……そうですか。それはありがたいですね。お待ちしております」

電話は、ほどなく切れた。

女から逃げている男、青井が間もなく現れるらしい。

マスターは棚からボトルを取り出した。

「ツケを払いに来てくれるのです。街を離れるそうです。まあ、いずれ、こうなることは解ってました」

「えっ？」

「彼は苦労性だ。幾人かの女性と同時に交際して行き詰まっている」

マスターは、別のボトルを取り出して何かを作り始めた。

「彼女が何人も居るんですか？　へーっ、羨ましい話ですね」

「それは、どうですか？」

「だって、毎日、違う女と付き合えたら楽しいでしょう」

「それは最初だけです。交際せずに一回だけの関係ならね」

「一回だけって……」

「例えます。その場限りの遊びなら楽しいでしょう。しかし、女性と関係を持って交際を続けようとすれば大変なことになる」

「三角関係ってやつですか。それは面倒ですよね」

「来たようです。今の話は、ご内聞に」

「これは、サービス」と言って、マスターはカクテルを作ってくれた。

ドアがギイと鳴り、その男は現れた。

ひよろつとした体格の、のっぺり顔だった。スーツを着てはいるが、着こなしが崩れて、何となく、ぎこちない感じだ。胸ポケットに覗かせたハンカチもわざとらしい。

さぞかし、イケメンだろうと想像していたのだが、意外なほど普通の面相だった。茶髪で色白なら、この程度でも、女達はイケメンと認めてしまうのだろうか？

この程度の男と比較するなら、僕は負けていないだろうと感じた。

「あつ、しまった。電池切れだ。マスター、電話を借ります」

青井は先にツケを清算してから、店の受話器を手にした。

彼は……青井は、この時、ことの重大性を解っていなかった。

「あ、夏樹さん？　ちよつと急な話だけど、イタリアへ出張することになったちゃつて……えっ？　どこつて……だからイタリア。えーとね、あれは確か……パリじゃなくて……そ、そう、そこ、ファイルンツ」

青井は、しどろもどろになっている。

「……いや、それが、しばらく帰れそうにないんだ。うん、会えなくなるのは、オレもつらいけど……」

よく、そんな、でまかせを……。

そんなセリフを傍で聞かされて、僕は胸くそが悪くなった。

「これまで、ありがとう……えっ？　いや、もうすぐ電車に乗るので。明日、早いフライトだから、空港近くのホテルに前泊するんだ。だから、そんな時間も……うん、そんな訳で、サヨナラ」

「あ、秋奈？　急な話なんだけど、イタリアへ出張することに……」

うん、フィラメントへ……えっ？ いや、違ったフィラレンツ」

青井は、あまり頭は良くないようだ。外国名を出すなら、調べてからにすりゃあいいのに。恐らくエロ漫画しか読んだことがないのだろう。

「冬美さん？ 急な話だけど……」

青井は次々に女達へ別れを告げている。

マスターは聞こえぬ振り、知らぬ振りで、コーヒーを飲んでいた。

マスターも僕と同様に、内心で呆れているに違いない。

「マスター、マティーニを下さい」

青井が注文した。

青井は、迷わずにマティーニの名を挙げた。マティーニがカクテルの代表格であることぐらいは僕でも知っている。

恐らく彼は、女性を口説く舞台装置としてバーを利用し、一つ覚

えのマティーニを注文しているに過ぎないのだろう。

マスターはカクテルを作り始めている。

僕は、当たり障りのないことを訊いてみた。

「マスター、材料は何ですか？」

「ドライ・ジンとドライ・ベルモットです。4対1の割合で混ぜるのです。標準は3対1で作ります。これ以上ドライジンを多くした場合はドライマティーニと呼びます」

マスターは、それらをミキシング・グラスに入れてステア（攪拌）した後、カクテル・グラスに注ぎ、最後にオリーブを飾った。

淀みなく流れるような手さばきで、マティーニが青井の前に置かれた。

この間に、マスターは「ベルモットとは、白ワインを主体として、ニガヨモギなどの香草やスパイスを配合して作られるフレーバードワインです。イタリア発祥のスイート・ベルモットとフランス発祥のドライ・ベルモットとがあるんです」と説明してくれた。

青井が現れる直前に作ってくれたカクテルは、マティーニだった。

つまり、マスターは青井から電話があった時点で、彼がマティーニを注文すると読んでいたのだ。

プロの仕事だ！

マスターの手際の良さは、人間観察と周到な準備に裏打ちされていたのだと改めて思い知った。

青井は、ふうつと、ため息を吐きながら汗を拭っている。

僕は、その姿を見て、【青息吐息】という言葉を連想して吹き出しそうになった。

まるで、その言葉は眼前の彼の為に考案された言葉のように思えたからだ。

「マスター、この店に最初に来たのは、いつでしたっけ？」

青井は、いくらか落ち着いたせいか、思い出話を始めた。

「初めて来店されたのは、去年の年明け早々でしたね」

「そうか、もう一年になるんですね。マスターには、お世話になりました。いろいろあって、ちよつとドジっちゃって……美春に秋奈と居るところを見られちゃったんですよ。もう、この街には……」

「寂しくなりますね。まあ、仕方がないでしょう。ともかく、そう決めたのなら早い方がいい」

この時、彼はマスターの言葉の意味を訊くべきだった。
それから、彼は思い出話を続けている。

マスターは、時計に眼を遣り「大丈夫ですか？」と訊いた。

「何がです？」

マスターは、「都会に住む女性を甘く見ると大変な事になる、早く逃亡した方が良い」と告げたのだ。

「何故ですか？」

「あなたは、店の電話を使ってしまった。恐らく彼女達は、こちら

へ向かっているでしょう」

「えっ？　そうか！　しまった！」

「先ほど美春さんが、あなたを捜して、ここへ来ました」

「えっ！　そうだったんですか！」

青井の顔色が変わった。その眼は、明らかに怯えている。

店の前の路地先から車の停まる音が聞こえた。

都会の女性は着信履歴から電話案内で照会して店を特定することなど朝飯前なのだ。

そうして彼女達是不審を感じたら即座に行動に移すことを僕は知った。

マスターの緊張した表情を見て、青井は更に青ざめている。

ギイと音を立て、ドアが開いた時、僕の背筋は凍った。

窮地

「あつ、やっぱり、ここに居た！ ジョージ、何やってんのよ！」

ジョージ？ ジョージとは？ 彼は一体、いくつの名前を持っているんだろうか？

「あ、秋奈……い、いや、これには、ちょっと理由があつて……その、つまりマスターに挨拶してから行こうと」

「さつきは、すぐに電車に乗るって言っただけだった？ あたしに会う時間も取れないって？」

青井は、いつの間にか、カウンターの中に居て、テーブルを挟んで女と対峙している。

「そ、そうだよ。だからマスターにツケを払ってからと思って。これから急いで行くところなんだ。よく来てくれたね」

「ふーん、パスポートを見せてよ」

「パスポート？ あ、それは、ほらコインロッカーに」

この期に及んで、まだ言い逃れるつもりなのか？ 無理だろ？

その時、ギイと音を立てて、別の女が顔を覗かせた。

「勝彦！ あんた、なんでここに居るの？」

その女は、またしても別の名前で男に呼びかけている。

「カツヒコ？ ちょっと、あんた、なに言ってるのよ」

秋奈が女を睨んだ。

「ジョージは、あたしの彼氏よ！」

「勝彦！ これは何なの？ どういうこと？」

「いや、違うんだ冬美さん。なんて言うか、これには、ちょっとした事情があつて……」

後から現れた女は冬美という名前らしい。

「勝彦！ この小娘はなんなの？ 説明してちょうだい！」

冬美は三十前後に見える。秋奈は二十代前半だろう。僕とそれほど変わらない筈だ。

冬美は秋奈に対して小娘などと揶揄して喧嘩を売っている。

「ちょっと、おばさん。なに言つてんの？ ジョージより年くつてそうじゃない？」

秋奈も負けてはいない。

僕が見るところ、二人とも若い大人の女性だ。小娘にも、おばさんにも見える筈がない。

売り言葉に買い言葉というやつだ。

「うつさいわね！ あたしは勝彦に訊いてんのよ！ 関係ない小娘は黙ってなさいよ！」

「な、なによっ……」

冬美の氣勢に圧されて秋奈は怯んだ。

「ちょっとジョージってば……」

秋奈が青井を見た。

「う、うん……」

青井は窮地に立たされている。だが、それに追い討ちをかけるように事態は更に悪化し、混乱を極めることになる。

新たな女が現れたからだ。

ギイツと音を立て、駆け込んで来た女は息を弾ませている。

「こんばんわーっ！ マスターッ！ 正樹が居るんでしょ！」

「いらっしやい」

マスターが短く挨拶を返した。

「あつ、やつぱり居た。正樹、あんた、そんなところで何やってんのよ？」

「な……夏樹……」

青井は、パニックになっているのだろう。彼の顔面は蒼白で脂汗が浮いている。

恐らく頭の中は真っ白で、何を言っているのか解らない状態に違いない。

「勝彦！ これは一体、何なの？ ジョージだの、マサキだのって……なんの真似？」

冬美がカウンター越しに青井に詰め寄って……

「ふざけた事やってんじゃないわよ!」

と強くなじりながら両手で激しくカウンターを叩いた時、異変は起こった。

不意に店内の照明が消えたのだ。

「あっ!」

「きゃーっ!」

「な、なにこれ!」

「うわっ」

女達は口々に悲鳴や驚きの声を上げた。

「おやつ? 停電ですか? 調べましょう」

暗闇の中でガサゴソとマスターの動き回る音を聞いた。

「皆さんは、そのまま動かないように」

そのまま、一分ほど息を詰めて待ったが、明かりは点かない。

「マスター？ まだなの？」

たまりかねて、誰かが小声で問いかけたが返事がない。

「マスター！ どうしたのよっ？」

突如として暗闇に置かれた不安に駆られてのことだろう。女達が続けざまに声を上げた。

「えっ！」

「きゃーっ！ な、何か居るわっ！」

「あひゃっ、何なのよ。うわっ、あたしの足を舐めてる。きゃーっ、こわいーっ」

何か動物が紛れ込んだらしい。

やがて、パタンツと微かな音がして、間もなく明かりが灯った。

「すみません、お待たせしました。何かのはずみでブレーカーが落ちたんですな」

マスターは、そう言いながらエアコンやオーディオのスイッチを入れ直している。

「お詫びに、コーヒーを淹れましょう」

「あら、やだ……子犬じゃないの」

冬美が可愛らしい声音を發した。

「わあっ、かわいいーっ！ あたし犬は大好きなの」

そう言っ て夏樹が白い子犬を抱き上げている。

カフェロワイヤル

「まーっ、かわいいーっ！ ちょっと、あたしにも抱かせて」

秋奈が、冬美と夏樹の間に割り込んで子犬に手を伸ばした。

女という生き物は、小さくて弱いものを可愛がり、育てようとする本能が強いのだろう。

子犬に氣を取られて、彼女達は青井が逃亡したことに、まだ気づいていない。

だが、僕は知っている。

マスターがブレーカーを落として、青井を裏口から逃がしたことを……。

「あっ、正樹は？」

ようやく気づいたようだ。

「ねえ、マスター……正樹は、どこへ行ったの？」

夏樹が問いかけた。

「おやつ？　そう言えば……」

マスターは店内を見回しながら上手に、とぼけている。

「あつ、勝彦のヤツ、逃げたわね！」

冬美は、青井が姿をくらまして既に店内に居ないことを、いち早く察知したようだ。

「ええっ？　そうなの？　ジョージは、どこに……？　まっ、いいつか。ねえ、おチビちゃん。あなたの、お名前は、なんでちゅかあ？」

秋奈は、気持ちの切り替えが早い女のように。目の前の子犬に夢中になってしまっている。

「あなたは、フワフワで可愛いでちゅねーっ」

子犬を入れたのだって、マスターの仕業に違いないのだ。

なんという機敏な機転なんだろう。

窮地に追い詰められた青井を逃がす為に、こんな方法があるとは思わなかった。

僕はマスターの知恵を仰ぎ見る思いだった。

「さあ、お待たせしました！ 停電のお詫びに、カフェロワイヤルをどうぞ」

マスターは、僕の前にコーヒーを置いた。

小振りのカップの上にスプーンが渡してある。そしてスプーンの上には角砂糖が乗っていた。

「えっ？ なに？ マスターも、あなたも【怪盗】ゲームやってるの？」

秋奈がロワイヤルという言葉に反応して僕に訊いて来た。

「え、ええ。僕も怪盗ゲームをやってますけど……でも、これは違うみたいですよ」

「なにが違うの？ あっ！」

秋奈が問い直して来た時、急に暗くなった。

「きゃっ！」

「な、なに？」

彼女達の声が店内に響いた。

またしても、マスターが照明を調節したのだ。

しかし、今度は光量を下げただけで、真っ暗ではない。

マスターがマッチを灯して、それを角砂糖に近づけると、薄青い炎が立ち上がった。

角砂糖が燃えている。

「わあっ！ なにコレ！」

「きれい……」

「これが、カフェロワイヤルです。ささっ、きれいどころの、お嬢さん方の分も、こちらへ用意しました。こちらへどうぞ」

マスターは女達にカウンター席へ座るように促した。

「さ、いいですか？ このカップをデミタスカップと言います。デミとは半分の意味です。こうして先端部にひっかかりを設けた専用の器具、ロワイヤル・スプーンを渡します。」

「ここへ角砂糖をひとつ乗せます。そしてブランデーを注いで染み込ませる」

マスターは説明しながら、作り方を実演してくれた。

「そして、角砂糖に火をつけ、まず青い炎を見て楽しむのです。きれいでしょ。溶けかけたところで、コーヒーに落とし、かき混ぜて飲むのです」

マスターは僕にそうせよと指し示した。

「あ……は、はい」

「これは、部屋を暗くした方が、より炎が美しく見えます。雰囲気も出ます。だから照明を抑えました」

マスターはマッチを擦り、次々に火をつけて、炎を並べた。

その手際の良さに感嘆し、僕等は魅入った。

マスターは明かりの光量を元へ戻した。

「あっ……おいしい」

女達は、カフェロワイヤルを玩味しながら、顔を見合わせ、笑顔で頷き合っている。

「ちょっとしたマジックのようなものをお見せしましょう」

マスターは、そう言ってカウンターの下からトランプを取り出した。

「さあ、いいですか。まず、これをシャッフルします」

マスターは器用にシャッフルしたのち、裏返しに置かれたトランプのトップカードを左手で取り、ゆっくりと差し上げて行く。

何が始まるのか？

僕等はトランプを注視した。

マスターはカードを爪で弾き、パンツと音を響かせてから、くると反転させた。

ハートのエースだった。

マスターは、そのカードをゆっくり元へ戻して行く。

すると……

「あらっ？ なに？ これ！」

トランプの脇に、カクテルグラスが現れ、中には見慣れぬ物が方円状に並べられて入っていた。

細いスティック状の、おつまみらしい。

「たばすたです」

「えっ？ なんですって？」

その言葉を聞いた時、最初は僕も意味が解らなかった。

たばすた

「タ・パスタです。パスタを焼いたお菓子です。美味しいですよ」

要するに、トランプを使ったマジックと見せて、実は珍しい、おつまみをカウンターに出しただけのことだった。

だが、この一連の出来事で、女達は当初の目的を忘れてしまっている。

彼女達は青井を捕まえる為に乗り込んで来たはずなのに……。

「あらっ、おいしいじゃない」

夏樹が最初に手を出して食べ始めると、冬美もスティックを手にとった。

「バジル風味ね。なかなかイケるじゃない。マスターが作ったの？」

「市販品です。コンビニで買えますよ。ビールやワインのおつまみ

に合うんです」

「みんな、ずるーい。あたしにも、ちょうだい」

秋奈が遠慮なく口を挟んで要求した。

「いいわよ。……はい」

真ん中に座った冬美が、秋奈に手渡してやっている。

そんな話題で、しばし過ぎたが、冬美が事の発端を思いだしたようだ。

「してやられたわ。マスターが逃がしたのね？」

冬美は、強く責める口調ではなく、穏やかに言った。

やっぱり、そこへ来たか……と、僕は思った。

青井を逃がす為に、次々と目まぐるしいまでに、意表をついて女達を眩惑する、マスターの作戦は成功した。

青井が逃亡する為の時間がせぎは成功した……それだけではない、下手をすれば器物を壊され、修羅場と化す最悪の事態を見事に回避させたのだ。とは言え、その後に、女達から責められる事も当然、予想できた筈だ。

マスターは何と答えるのだろうか？

マスターはカウンターから出て、秋奈に近寄った。

「秋奈さん、ちょっと、その犬を……いいですか？」

「ええっ？ もう？ もっと抱いていたいのに」

マスターは、秋奈から子犬を受け取り、そのまま冬美へ抱かせた。

「あらっ！」

冬美は驚いて声を発したが、嬉しそうに子犬を抱いている。

「この子犬は、青井くんから預かったのです」

「えっ？ そうなの？」

「あなた達の共通点は、いずれもキュートな美人で、しかも犬が好きな点です。違いますかな？」

「ええ、たしかに犬は好きだけど……」

「彼があなた達と親しくなった決め手は、犬の話題ではなかったですかな？」

「あつ、そう言われれば……そうかも？ あたし、この前、ペットショップに一緒に行ったもの」

秋奈が応じた。

「あつ、あなたも？」

夏樹が秋奈へ視線を向けた。

「なあに？　じゃあ、あなた達も【ペトランド】へ連れて行かれたの？」

冬美が、秋奈と夏樹に交互に確かめると、彼女達はうんうんと頷いている。

マスターは、カウンターの中へ戻り、煙草に火を点けてから告げた。

「彼と過ごした最初の夜を思い出して下さい。恐らく、彼の、犬のような舌使いに、あなた達は参ってしまったのではないのですかな？」

「えっ？」

マスターにしては、下世話な話を持ち出したものだ。

「彼の技に、腰は自然に持ち上がり、ベッドの上で、のた打ち回ったのではないのですかな？　あるいは、そこは、もっと、こうやる

のよっ！　などと奉仕させたり、しませんでしたかな？」

「マ……マスターったら……」

女達は一様に顔を赤らめている。

「その子犬は、捨て犬で、公園の入口で震えていたそうです。彼は、見捨てて置けずに、ここへ連れて来たのです。優しい男だ」

なるほど。巧みな会話の技術だ。

「マスターが逃がしたのね？」との詰問には反駁せず、それを受け流して、別の切り口で切り返した。老練とは、このことだろう。

「私は嘗て（かつて）青井くんにつだけ、言ったことがあります。それは……」

マスターは言葉を選びながら続けた。

「成り行きで、女を怒らせることはあるかも知れない。だが、悲し

ませてはいけないと」

マスターが、そう語った時、僕は、アッと思った。

なるほど、彼は何人もの女性を怒らせた。

しかし、泣かせてはいない。女性を悲しみに暮れるような目に遭わせてはいないのだ。

僕は、つい、さつきまで、青井はサイテーな男だと感じていたのだが、マスターの話を聞いていると、なかなかいい奴だと思えて来るから不思議だ。

「冬美さん、私の知る限りでは、青井くんと一番、付き合いの長いのは、あなたではないですか？」

「えっ？ そうなのお？ あたしは、他に女がいるなんて知らなかった」

秋奈が声を上げたが、それは冬美も夏樹も同じ思いだったに違いない。

「マスターは、知ってたのよ。あたしが一番なんですって。これで解ったでしょ？」

冬美は、秋奈と夏樹を交互に見た。

「古い順番で一番なんでしょ？　ねっ！　そう言ったのよねマスター？」

秋奈は、妙に食い下がり、対抗心を露わにした。

「私は、付き合いの長いのは、と言ったのです。古い新しいではない。私が話そうとしたのは……」

マスターが言いかけた時、ギイツと音が響いた。

縁

入って来たのは美春だった。

「マスター、ありがとう！ やっちゃんに言ってくれたのねっ？
あたしに電話するようになって」

彼女はニツコリしながら明るく告げた。

さっきとは打って変わってチャーミングに見える。

「連絡がありましたか。……そうですか。良かった」

マスターも、にこやかに応じている。

「あたしね。本当はね。あいつを取っつかまえて、ギッタンギッタンのボロボロのギューの目に遭わせてくれるって思ってたのよ。でもね……さっき、素直に謝って来たから、許してあげたの」

ギッタンギッタンのボロボロのギューの目とは……美春さんは言

い方が、いちいち強烈だ。それは激しい気性の表れなのだろうが、
良くも悪くも自分の気持ちを隠さない、正直さとも言える。

「名古屋でやり直して、自信がついたら、あたしを呼びたいって言うの。他の女とは別れたんだって。ふふん……あれで、かわいいところもあるのよ」

彼女が、そう告げた時、僕はヒヤヒヤした。別れた当の女達が、ここに居るのだ。

彼女達は、美春の存在を知らない。

違う男の話だと思っているのだろう。

マスターと僕だけが、事の次第を知っているのだ。

青井は、美春だけには正直に行き先を告げている。

どういうことだろうか？

彼は美春をいちばん恐れ、彼女から逃げていたのではなかったのか？

僕には訳が解らない。

美春の携帯が鳴った。

「あ、やつちゃん？ ……どうしたの？ えっ？ これから？ それは、いいけど……。えっ？ なあに？ あたしとチューしたいってこと？ えっ、あんた、どこに居るのよ。ええっ？ 朝まで、ペろんペろん？ ぐりんぐりん？ 眠らせない？ バカッ！ 人前で、そんなこと言うんじゃないのっ！ うふん、いいけど……」

聞いている方が……。いや、聞かされている方が恥ずかしくなってくる。

女達は笑いながら顔を見合わせている。

美春はマスターに右手を小さく振り、携帯で話しながら、店を出て行った。

「ねえねえ、マスター。今の女、ずいぶん、さばけちゃってる感じだけど、いつも、あんななの？」

夏樹が尋ねた。

「ふむ……まあ、そうです。あんな感じです」

「でも、笑っちゃうわよねえ。相手の男の顔を見たいもんだわ」

「ほんとっ！ バカッブルもイイとこだわっ」

秋奈が合いの手を入れた。

「うぶっ……ぶぶぶーっ」

女達の会話を聞いて、僕は堪らず吹いてしまった。

「ちょっと、なによ。あなただって、そう思ったでしょ？」

秋奈が僕の顔を見ている。

「あっ、すいません。ええ、僕もそう思いました。相手の男の顔を

見てみたいもんです。あはははっ」

「ねえ、マスター。このワンちゃん、あたしに、ちょうだい？　だめかしら？」

冬美がマスターに訊いた。

「この子ね。あたしの顔をじーっと見てから、寝ちゃったの。あたしをママだと思って安心しちゃったのよ」

彼女は子犬に頬を擦り寄せている。

「ほうつ、それはそれは……。このワンちゃんは、あなたと縁があるのかも知れませんな。では、そうしてやって下さい」

「ありがと。じゃあ、あたし帰ります。この子に何か、おいしいもの作ってあげなきゃ。マスター、ご馳走さまでした」

そう言って、冬美は帰って行った。

マスターは、冬美の母性本能の強さを見抜いていたのかも知れない。

男を従わせる気の強さと、母性本能の強さには何か相関があるのだろうか？

僕が、ぼんやりと、そんなことを考えていると……

「縁か……」と夏樹が呟いた。

「縁です」

マスターが短く応えた。

「そう、そうなのよね」

夏樹は、何事かを思い出したのだろう。ひとりごちてカフェロワイヤルを飲み干した。

マスターの解説が始まった。

「あのワンちゃんは、飼い主の何かの事情で捨てられてしまった。そこへ偶然、青井くんが通りがかり、彼に拾われて、ここへ連れて来られた。それは本人の意志ではない」

「ええ、たしかに」

「そして偶然にも、ここに犬の好きな三人の女性が居合わせた。その中で、冬美さんと目が合った。ワンちゃんは、なぜだか眠くなってしまった。安心したからです。これは、ワンちゃんと冬美さんの間に縁があつたとしか言いようがないでしょう」

「じゃ、じゃあ、あたしとワンちゃんには縁がなかったっていうこと?」

秋奈が問う。

「ところが、そうではないのです。秋奈さんと夏樹さんは、ワンちゃんが幸せになる為に、一役買ひとやくっているのです」

「ひとやく?」

「そう。冬美さんは夏樹さんや秋奈さんに先を越されて、ワンちゃんを抱くチャンスを逃してしまった。実は、その対抗心がワンちゃんへの愛情を深くしたのです」

「ふーん」

「それをマスターが感じ取って、冬美さんに抱かせたんですね？」

僕は、いつしか会話に参加していた。

「まあ、そういうことです」

マスターは、うまそうに煙草を吹かしている。

「あなた達は、そんな事を考えながら子犬を抱いたのではない。ただ可愛いから抱いただけでしょう」

「それは、そうよ。可愛いからよ」

「人の世というのは不思議なもので、自分の何気ない行動が、時に

は他人に影響を与えるのです」

「そうなの？」

夏樹は、マスターの話が気になるようだ。

「そうです。例えば、もし彼が、そこでケーキを美味しそうに食べていたとしたなら、どうです？ 急に食べたくなるでしょう。彼は、あなた達に、そう思わせてやろうなどと考えている訳ではない」

「あつ、それは、そうよね。ねえ、マスター。マスターが、そんなこと言うからケーキ食べたくなっちゃった」

秋奈が甘えるように言った。

「だ、そうです。どうしますか？」

「えっ？ 僕？」

マスターは、突然、僕に話を振って来た。

「いや、まあ、ケーキぐらい、奢ってもいいですけど。どこで売ってるんですか？」

「ステキッ！ あたし、あなたの事、気に入ったわ。さっきから見てるのに鈍感だけど。いいわ。今から、あたしの彼氏にしてあげる。年も同じぐらいだし。ねっ？ 一緒にケーキ買いに行こうか？」

秋奈は積極的な女性だ。

「成り行きで、そうなるのも縁です。二人で行ってらっしゃい」

カタルシス

僕は秋奈に手を引かれて店を出た。夜気が身体に染みる。

「こんな時間にケーキ屋が開いてるのかなあ？」

「メロディーよ」

「えっ？」

「駅前のスイーツ喫茶メロディーなら深夜2時まで、やってるのよ」

その店は、仕事帰りのホステス達が利用するので、遅くまで開けているのだと、秋奈は説明してくれた。

「あたし、だんだん腹が立って来た！」

「えっ？」

「あいつよ！ ジョージのやつ」

「あつ……うん」

僕は余計なことを言わないように務めた。

「あいつ、もう、サイテーッ！ 偽名を使って、いろんな女に手を出してたなんてっ！ とんだエロ野郎だわっ！ ねっ、そう思わない？」

秋奈は僕の顔を覗き込んで同意を求めた。

「う、うん。 まあ……」

「まあ、いいわ。 あたし広川秋奈。 キャバ嬢やってるの。 あなたは？」

「あ、僕は橋本優太。 工場に勤めてるんだけど……でも半年ごとの契約だから、正社員じゃないんだ」

「そう。 まじめなのね」

秋奈は、青井の不真面目さと対照的だと言いたいのだろう。

それは、そうだ。僕とて、あんな無責任な男と同類に見られては迷惑だ。

だが……彼が、いいかげんだったからこそ、僕は秋奈と出会い、何でもないことが評価されている。

僕は右手にケーキの入った箱を提げ、左手で秋奈と手をつなぎながら店へ戻った。

「ただいまーっ」

秋奈は上機嫌だった。

夏樹さんがハンカチで眼を押さえている。

何があつたのだろうか？

彼女は、さつき、マスターの『縁です』という言葉に反応して何かを思い出した風に見えた。

過去の恋愛の古傷を思い出したのだろうか？

だが、女性は現実的だし、男のように過去の未練を引きずらないと聞いたことがある。

それは個人差もあるだろうから、一概には決めつけられないが…
…彼女には余程、辛い何かがあるのだろうか？

若い女性が泣く理由とは恋愛がらみの何かに違いないと察しはつく。
く。

「さあつ、食べましょー！」

秋奈はマスターからケーキ皿を出して貰い、取り分けて配った。

「無理に忘れることはないのです」

マスターが諭すように言った。

「どうしても忘れられないとすれば、深い縁があるのです。そうした関係をソウルメイトと言うのです」

「ソウルメイト？」

夏樹は顔を上げてマスターを見ている。

「そう。魂の伴侶です」

「たましいの……」

「彼には、家庭があり家族がある。家族を幸せにする責任がある。それこそ、深い縁で出会い、結ばれた関係です。それを断ち切つてまで、あなたとの恋を实らせる訳には行かないでしょう。そんなことをすれば社会的な信用を失うことになります」

夏樹は、家庭持ちの男との恋愛に苦しんでいるらしい。

「それは、あたしも、わかってるんです。だから別れました」

「あなたと彼とは遠い昔に……何百年も前に同じ時代に生まれ、夫婦として暮らした間柄であつたかも知れません。或いは外国に生まれ、嘗て恋人であつたかも知れない。それは誰にも解らない。もしかすると……」

「もしかすると……？」

「遠い別の星で苦楽を共にした間柄だつたかも知れません」

僕は驚いた。ソウルメイトだの、遠い別の星で生まれたなどと、考えた事もない話だからだ。

夏樹さんも面食らっているに違いないと思い、眼を遣ると彼女は、深く頷いている。

「縁があるから、また出会つたのです。そんな彼と逢えないのは悲しいでしょう。苦しいと思います」

マスターは何を言ってるのだろつ。そんな言い方をすれば彼女はもっと悲しむじゃないか。

「でも、大丈夫。時が解決します。いずれ時が過ぎれば、あの日、あの頃は、悲しくて、やりきれなかった。でも、それを乗り越えて今の自分があるのだと懐かしむようになります。しかし、そうは言われても、今の苦しみは簡単には癒やされないでしょう。だから…」

「だから……？」

「日記を書くといいでしょう。今の自分の胸の内を吐き出すのです」

「日記？」

「そう。日記です。逢えなくて、こんなにも淋しい。悲しい。うらみつまみでも、恋心でも、なんでもいい。心を感じるままに綴って行けばいいのです」

マスターは、夏樹さんの前にグラスを置いて水を注ぎ始めた。

何をするつもりなのか？

マスターはグラスに水を注ぎ続けた。

あつ！ こぼれるっ！

マスターはグラスから溢れさせてから水を注ぐ手を止めた。

「忘れられない想いを抑え込み、つらい気持ちを、こらえるのではなく、思い切って溢れさせてしまうのです」

なるほど。そういうことか。僕は、その解りやすい例えに納得した。

「そうして空へ呼びかけるのです。あなたの呼びかけを彼は感じ取ります。魂の呼びかけは通じるのです。いや、あなたの悲しみを彼は既に解っています」

「……わかつている？」

不意に夏樹さんの眼からぼろぼろと涙が溢れた。

「それでいい。……思いきり泣いてしまいなさい。あなたの苦しさは、他の誰にも解ってはもらえない。当然です。しかしソウルメイ

トの彼には届いているのです」

マスターが、そう言うつと、夏樹さんは洗面所へ駆け込んだ。

きっと彼女は洗面所の中で思いきり泣いて、化粧を直して来るのだと察しがついた。

「あれでいいのです。カタルシスと言うのです」

「カタルシス？」

「そう。感受性の度合いは人それぞれです。忘れられない事が、いつまでに解消するとは、一概には言えません。けれども、そうしていれば、いつの日にか必ず心に芽生えるものがあります。それまで……要は気が済むまでです」

気が済む？

そうか。そう言えば、美春さんは『未練がある訳じゃないの。とつちめないと気が済まないのよ』と言っていた。

成り行きの結果ではなく、気が済むか済まないかの問題なのだ。

それにしても、あんな事を言いながら彼女は、青井を赦して縊りを戻している。結局、青井と美春さんには深い縁があったのだろう。

ほどなく戻った夏樹さんにマスターは告げた。

「あなたは、この世では、別の誰かを幸せにする役割があるのだと私は思います」

そう言って、マスターは何かを作り始めた。

「別の誰か？」

夏樹さんは怪訝そうに小首を傾げた。

「そう。まだ見ぬ誰かです。そして、その男は、あなたの助けを必要としている。男が一人前になるには母親の手を離れても尚、必ず女性の力が必要なのです。男を育て、能力を発揮させるのは女性の役割です」

「役割？」

夏樹さんはマスターの背中に問いかけている。いや、それは問い返しではなく、そうかも知れないとの肯定の響きだった。

夏樹さんの瞳に力が宿ったと僕には思えた。

みちしるべ

「ジンフィズです」

マスターはカクテルを作ってくれた。

それは、三角形のグラスではなく、タンブラーグラスで並べられた。

フィズ（f i z z）とは、炭酸水の泡のはじける《シャーツ》という音を表わす擬音語である。スピリッツやリキュールに甘味（砂糖）、酸味^{レモンなど}を加えてシェークし、炭酸水で割った飲物を「フィズ」と言う。

「サッパリした口当たりでしょう。マスカットを少量、加えてあります。ケーキを食べながらと言うのは珍しいケースなので少し工夫してみました」

「あつ、これ、おいしいっ！　ねえねえ、マスター。この人ったら、女性と付き合ったことがないんですって。草ばかり食べてるからよ。だからね……あたしが、いろいろと教えてあげなくちゃ、しょうがないと思うの」

秋奈が真顔で言う。

「い……いろいろって」

僕は、秋奈とマスターの顔を交互に見た。

「ふむ。そうですね。男が一人前になるには、あんなことや、そんなことも少しずつ、しっかりと覚えていかなくては。女と男は、そうして幸せを感じるように出来ています。……是非、そうしてあげて下さい。手を抜かず、腰が抜けるほど入念に、これでもかと言うほどに仕込んであげてください。今夜は眠れないかも知れませんが」

「マ、マスター」

夏樹さんが遠くから笑っている。

「ほらね。マスターも賛成してくれたから、あなた、今日は、あたしんちに泊まってきなさい」

秋奈は勢いついている。

こんなものなのだろうか？

こんなに簡単に、初めて会った女性と一夜を共にしていいものなのか？

そんな僕の戸惑いをマスターは見透かしたようだ。

「それも、縁です」

マスターは、タンブラーグラスを掲げて、にこやかに告げた。

マスターは、さっき夏樹さんに「誰かを幸せにする役割があるのです」と言った。

幸せにしてくれる男を探してつかまえよなどとは言っていない。

これは、大きな違いだ。

秋奈は、「草ばかり食べているから彼女ができない。いろいろと教えてあげなくちゃしょうがない」などと言うが、それは、僕をバカにしたのではない。

僕に好意を持ってくれたということだ。

傲慢な物言いのようでいて、実は、それは彼女らしい優しさから発した僕へのアプローチなのだろう。

マスターも、それに乗じて秋奈に、けしかけるようなことを言った。

僕は、「冗談で、からかわれたと思ったが、そうではないんだ。

意味が解った。

きっと、それは付き合う彼女が出来なくて、弱気になっていた僕へのエールだったんだ！

「マスター、ご馳走さまでした」

秋奈に腕を引かれて、僕は店をあとにした。

「寒いわね」

「うん、寒いね」

「ねえ、あたしが寒いって言ってるのよ。抱き寄せて体をくっつけなさいよ」

「えっ？ あ、うん。そうか……じゃあ」

僕は、ときどきしながら秋奈のウエストに手を回した。

「そう。それでいいのよ。あったかいでしょ？」

「うん、あったかい」

こうなれたのはマスターのお陰だ。マスターがお膳立てをしてくれたからだ。不思議な人だ。

店を振り返って視ると【みちしるべ】の看板が路地奥の正面で白く輝いている。

そうかつ！ 店の名前ではない。マスターそのものが【みちしるべ】なんだ。

僕も、あんな人になれるだろうか？

大きな水銀灯が照らす明るい歩道を、秋奈と体を寄せ合って歩いた。

秋奈と眼を合わせると彼女はウィンクしながらキスの口真似をする。端からは、きつとバカカップルに見えるだろう。

でも、愛らしい人だ。僕は秋奈の好意と期待を無にしてはならない。これからは秋奈が傍に居てくれる。この都会でも頑張れそうだし、もしかすると、秋奈を幸せにすることが僕の役割なのかも知れない。

忙しげに駅前を行き交う人混みの中で、僕等は暢気な恋人だった。

バカカップルでもいい。

この人が僕の彼女です！

僕は行き交う人に言ってあげたいほど誇らしく、幸せな気分だった。

――

あとがき

この作品は、前作『明日へ』で登場させたマスターの人物像が好評で、「マスターシリーズとして続編を書いて欲しい」との要望が寄せられ、それに気を良くして書いたものです。

あくまでも脇役なのですが、主人公よりも魅力的に映ってしまっただようです。

しかし、この予想外の要望は作者としては嬉しいものでした。

ここで、それは書けませんでは、ストーリーテラーとしての資質を疑われます。

これまで同じキャラクターを登場させることは無かったのですが、今回は例外でした。

主人公は、田舎物の青年です。都会へ出て来て就職するも、日本経済の低迷により契約社員として工場に勤務する立場です。

そんな彼には、いつまでも彼女が出来ず、自信を失いかけています。

バーのマスターに励まされ、気を取り直していたところへ、女から逃げている男が姿を現して騒動となり、居合わせた青年は、その恋愛がらみの茶番劇を目撃することとなる。

成り行きで、バーに乗り込んで来た女性の一人から声を掛けられる。

同年代女性の好意とマスターの善意に支えられ、自信を回復する青年の物語です。

前作『明日へ』は、アラサーの女性が主人公です。こちら是非、お楽しみ下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4754q/>

みちしるべ

2011年10月8日13時09分発行